

6 年間授業時数の配当のポイント

自閉症・情緒障害学級の場合、自立活動の指導時間を確保する必要があるため、他の各教科の指導時数の配分の工夫が必要になります。

自閉症・情緒障害学級の週時程編成の考え方

①自立活動の授業時数の決定

まず、在籍する児童・生徒の障害等の状況から自立活動の指導時間を決定します。このモデルでは、週2単位時間、年間70単位時間を設定しました。（表1、表2）
また、自立活動の指導時間の設定は、学年によって変えることもできます。対人関係やコミュニケーションの指導に十分な時間をかける必要がある低学年では、多くの指導時数を設定し、指導の成果が積み上がった高学年では、指導時数を少なくするという設定の仕方もあります。

②各教科等全体の授業時数の決定

自立活動を週2単位時間（年間70単位時間）設定するため、他の教科、領域の年間授業時数を減ずる必要があります。

基本的には、自立活動の時間に指導する内容と重複する内容や、自立活動の指導で補える内容を十分に吟味した上で減ずることが望ましいと考えられます。例えば、自立活動の指導で、話し合い活動や感情や気持ちを理解する内容を取り扱うことから、国語科の授業時数から、同様の内容を取り扱う時数を減ずることが考えられます。また、自立活動の指導で集団や社会の一員としての自分の役割や行動の仕方について考え、安全で適切な行動ができるようにするための学習に取り組むことから、生活科等の時数を減ずることなどが考えられます。一方で、算数科や音楽科、理科は、自立活動で取り扱う内容と関係が少ないため、減ずることが難しい教科であると考えられます。

表1、表2の例では、小学校低学年は、国語科を週1単位時間（年間35単位時間）、生活科を週1単位時間（年間35単位時間）それぞれ減じています。高学年は、生活科の代わりに総合的な学習の時間を減じています。

総合的な学習の時間では、その学習の過程において、「自分自身に関すること」（自らの行為について意思決定する）、「他者や社会との関わりに関すること」（異なる意見や他者の考えを受け入れる）などの点に配慮し、児童・生徒の資質や能力や態度を育てていくことを示されています。これらの指導内容は自立活動の時間の指導と関連することから、高学年は総合的な学習の時間を減じています。

③交流及び共同学習の時間について

児童・生徒が通常の学級の授業に参加する場合、通常の学級と連携して授業時数の調整を行い、計画的に進めます。また、交流及び共同学習を円滑に進めるために、自閉症・情緒障害学級の時間割を、できるだけ交流及び共同学習を行う通常の学級の時間割に近付ける配慮も有効です。

表1 自閉症・情緒障害学級の週時程表編成例（小学校第2学年）

	月	火	水	木	金
1	算数	算数	算数	算数	算数
2	国語	国語	国語	国語	国語
3	音楽	音楽	体育	体育	体育
4	自立活動	特別活動	自立活動	生活	生活
5	国語	図工	国語	道徳	国語
6		図工			

国語科 年間 315 単位時間⇒280 単位時間
生活科 年間 105 単位時間⇒ 70 単位時間

自閉症の特性に配慮し、同じ教科はできるだけ帯で時数を取るなど、児童が見通しをもって授業に取り組めるような工夫をすることも考えられます。

表2 自閉症・情緒障害学級の週時程表編成例（小学校第6学年）

	月	火	水	木	金
1	算数	算数	算数	算数	算数
2	国語	国語	国語	国語	社会
3	音楽	家庭/音楽	体育	体育	外国語活動
4	自立活動	特別活動	自立活動	家庭	総合的な学習の時間
5	理科	図工	理科	道徳	理科
6	社会	図工/体育		社会	クラブ

国語科 年間 175 単位時間⇒140 単位時間
総合的な学習の時間 年間 70 単位時間⇒ 35 単位時間

7 児童・生徒の実態の把握

自閉症・情緒障害学級の教育課程編成では、自立活動の指導時間数との関連において他の教科等との授業時数を調整する必要があります。

また、各教科の指導内容を検討・精選するに当たっては、児童・生徒のアセスメントを適切に行うことで、児童生徒の学習習得状況を明らかにし、個々の児童・生徒の学習課題に応じて指導内容を選択できるように配慮する必要があります。

ここでは、この研究において開発した「国語科学習評価シート」、「算数科学習評価シート」を紹介します。

(1) 国語科学習評価シートについて

表3 国語科学習評価シート（一部抜粋）

		1、2年生	3、4年生 評価規準に盛り込むべき事項	5、6年生
A 話すこと・聞くこと		・相手に応じ、身近なことなどについて、事柄の順序を考えながら話したり、大事なことを落とさないように聞いたり、話題に沿って話し合ったりしようとしている。	・相手や目的に応じて、調べたことなどについて、筋道を立てて話したり、話の中心に気を付けて聞いたり、進行に沿って話し合ったりしようとしている。	・目的や意図に応じて、考えたことや伝えたいことなどについて、的確に話したり、話し手の意図をつかみながら聞いたり、計画的に話し合ったりしようとしている。
		・話したい聞きたいという願いをもって、進んで話したり聞いたりしようとしている。	・話の構成や内容への関心を深め、工夫をしながら話したり聞いたりしようとしている。	・立場や意図をはっきりさせながら、適切に話したり聞いたりしようとしている。
B 書くこと		・経験したことや想像したことなどについて、順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書こうとしている。	・相手や目的に応じて、調べたことなどが伝わるように、段落相互の関係などに注意して文章を書こうとしている。	・目的や意図に応じて、考えたことなどを文章全体の構成の効果を考えて書こうとしている。
		・自分の思いを書いて伝えることよきを見付けたり楽しさを感じたりしながら、進んで書こうとしている。	・自分の考えが明確になるように、工夫をしながら書こうとしている。	・自分の考えを明確に表現するため、適切に文章を書こうとしている。
C 読むこと		・書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりして読もうとしている。	・目的に応じて、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら、本や文章を読もうとしている。	・目的に応じて、内容や要旨をとらえ、自分の考えを明確にしなが本や文章を読もうとしている。
		・知識を得たり好きなところを紹介したりするために、本を選んで、楽しんで読書しようとしている。	・読んで感じたことや考えたことを明らかにしながら、幅広く読書しようとしている。	・読書を通して自分の考えを広げたり深めたりしようとしている。
A 話すこと・聞くこと		・身近なことや経験したことなどから話題を決めている。(ア)	・関心のあることなどから話題を決めている。(ア)	・考えたことや伝えたいことなどから話題を決めている。(ア)
		・話題に合わせて、必要な事柄を思い出している。(ア)	・必要な事柄について調べ、要点をメモしている。(ア)	・収集した知識や情報を関係付けている。(ア)
		・相手に応じて、話す事柄を順序立てている。(イ)	・相手や目的に応じて、理由や事例などを挙げながら筋道を立てている。(イ)	・目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫している。(イ)
		・丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話している。(イ)	・丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話している。(イ)	・場に応じた適切な言葉遣いで話している。(イ)
		・姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話している。(ウ)	・相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話している。(ウ)	・共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話している。(ウ)
		・大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞いている。(エ)	・話の中心に気を付けて聞き、質問をしたり感想を述べたりしている。(エ)	・話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめている。(エ)
	・互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合っている。(オ)	・互いの考えの共通点や相違点を考え、司会や提案などの役割を果たしながら、進行に沿って話し合っている。(オ)	・互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合っている。(オ)	

国語科学習評価シートには、小学校及び中学校における国語科の学習内容が網羅されており、評価シートを使ってアセスメントを行うことで、児童・生徒一人一人がこれまでに習得してきた国語科の学習内容や、国語科に関する関心・意欲・態度の状況等が分かります。

国語科学習評価シートを使うことで、どのような学習内容を重点的に取り扱っていくべきかを検討することができます。

(2) 国語科学習評価シートの活用から分かったことについて

本事業で国語科学習評価シートを活用してアセスメントを行った結果、自閉症・情緒障害学級の児童には次のような傾向があることが分かりました。

- ◆算数科と比べて、国語科に苦手意識をもっている児童が多い。
- ◆話すこと・聞くことに関しては、相手の話を最後まで静かに聞くことや、自分の話を相手に分かりやすく伝えることに困難がある。
- ◆国語科の内容に関しては、読むことに比較的意欲的に取り組める一方で、書くことには意欲をもって取り組むことが難しい傾向がある。
- ◆作文では、経験したことは書けるが、自分の感じたことや気持ちを書くことが難しい傾向がある。
- ◆文章の読解では、説明文の読み取りはできるが、物語文等で登場人物の心情を読み取ることに困難がある。

このように、国語学習評価シートを活用することで、児童一人一人の得意なことや苦手な部分を明らかにすることができます。こうした評価結果を基に、年間指導計画を作成します。

また、評価結果を個別指導計画を作成する際の資料とすることで、児童・生徒一人一人に応じた学習目標や、学習内容、指導の手だてを検討することができます。

(3) 算数科学習評価シートについて

算数科は、例えば第3学年で円の中心や直径、半径について学習した上で、第5学年で円周率について学習し、第6学年で面積の求め方を学習するように、下学年で学習した内容を基に上学年の学習内容が積みあがっていきます。そのため、算数科の学習を進める上で、児童・生徒一人一人がこれまで習得してきた学習内容を把握することは不可欠です。

※68ページ及び70ページに掲載した「国語科学習評価シート」「算数科学習評価シート」は、平成23、24年度の本研究・開発事業において専門委員を担当された独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主任研究員の小澤至賢先生が、開発されたものです。

算数科学習評価シートは、このような学習習得状況を読み取るツールとしても有効に使うことができます。個別指導計画作成の基礎資料とするとともに、学習内容を精選する際などにも活用することができます。

表4 算数科学習評価シート（一部抜粋）

1年生		算数への 関心・意欲・態度	
技能	知識・理解	数学的な考え方	算数への 関心・意欲・態度
ものの個数や順番を数えたり、加法及び減法の計算をしたりするなどの技能を身に付けている。	数についての感覚を豊かにするとともに、整数の意味と表し方、加法及び減法の意味について理解している。	数の意味や表し方、加法及び減法の計算などについての知識及び技能の習得や活用を通して、数理的な処理に親しみ、考え表現したり工夫したりしている。	数の意味と加法及び減法の計算に親しみをもち、それらについて様々な経験をもちようとしている。
・ものともを対応させることによって、ものの個数を比べることができる。	・一つの数をほかの数の和や差としてみるなど、数の構成についての豊かな感覚をもっている。	・ものの個数を数えたり比べたりすることを通して、数の読み方、表し方、大小や順序について考えている。	・具体物などのものの個数を正しく数えたり表したりしようとしている。
・ものの個数や順番を正しく数えたり表したりすることができる。	・2位数の表し方について理解している。	・10のまとまりを作って数えることを通して、十を単位とした数の表し方を考えている。	・ものの個数や順番を数を用いて表すことよきに気付いている。
・数の大小や順序を考えることによって、数の系列を作ったり、数直線の上に表示したりすることができる。	・簡単な場合について、3位数の表し方を知っている。		
・一つの数をほかの数の和や差としてみるることができる。	・具体物をまとめて数えたり等分したりするなど、数の大きさや構成についての豊かな感覚をもっている。		
・数を十を単位としてみるができる。			
・具体物を幾つかずつまとめて数えたり等分したりすることができる。			
・1位数と1位数との加法及びその逆の減法の計算が確実にできる。	・合併や増加、求残や求差など、加法及び減法の意味について理解している。	・1位数と1位数との加法及びその逆の減法の計算の仕方を考えている。	・1位数と1位数との 加法及びその逆の減法の計算の仕方を考えようとしている。
		・簡単な場合について、2位数などの加法及び減法の計算の仕方を考えている。	・加法及び減法を用いて身の回りの問題を解決するなど、加法及び減法を進んで用いようとしている。

このことから、年間指導計画や単元指導計画を作成するに当たっては、以下のような配慮を行うことが大切です。

- ◆計算は得意であるが、文章問題は内容を理解して立式することが難しい。
立式の考え方（手順）の視覚化や、具体物を使った動作化を取り入れ、分かりやすく提示する。計算は得意であることから、日常的に計算問題に取り組んで成功体験につなげ、学習に対する意欲の向上を図ることができる。
- ◆物の長・短、軽・重の比較はできるが、長さや重さ等を実測する経験が少ない。
生活に関係の深い長さや重さの学習を充実させることで、習熟を図る。長さを比べる学習においては、木片や色板等の具体物を用いて、直接比較できるようにし、得意な、分かりやすい活動による成功経験を増やししながら、単位の学習や定規等を使った測定の学習に取り組ませる。
- ◆平面図形については理解できるが、立体図形については裏側や反対側が見えないため構成する要素を理解することが難しい。
平面図形については理解ができていることから、立体図形各面の「上、下、前、後」等の構成要素を表す言葉を付けることで、見えない面を児童・生徒がイメージしやすくなる。

「東京ベーシック・ドリル」の活用について

東京都教育委員会は、東京都における公立小学校の児童の「確かな学力」の定着と伸長を図ることを目的として、基礎的・基本的な知識等を確実に身に付けさせるための教材として「東京ベーシック・ドリル」を作成しました。

「東京ベーシック・ドリル」は、小学校第4学年までの学習指導要領に示されている教科の目標や内容を基に、基礎的・基本的な内容を繰り返し学習することができる教材です。

小学校の自閉症・情緒障害学級においても、学習内容の学習習得状況を読み取るツールとして有効に使うことができます。また、個別指導計画作成の基礎資料とするとともに、学習内容を精選する際などにも活用することができます。

なお、「東京ベーシック・ドリル」は、電子データで都内公立全小学校に配布されています。

(4) 算数科学習評価シートの活用から分かったことについて

算数科学習評価シートを活用してアセスメントを行った結果、自閉症・情緒障害学級の児童には次のような傾向があることが分かりました。

	得意とする学習内容	苦手な学習内容
数と計算	整数の四則計算	文章問題
量と測定	長さ・水のかさ・重さの直接比較	目盛りの読み取り
数量関係		式による表現、 資料の分類・整理
図形	平面図形の識別や分類	立体図形の特徴や構成